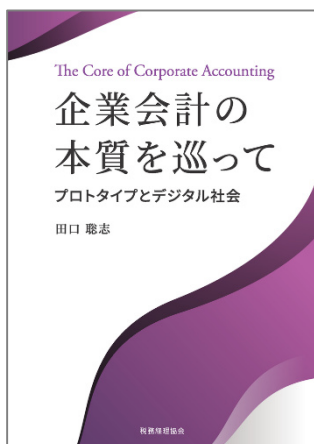


【 書 評 】



『企業会計の本質を巡って プロトタイプとデジタル社会』

田口 聡志 著

株式会社税務経理協会

2025年3月刊

A5判・388頁

本書は、理論的要素から導かれる「あるはずの会計」をプロトタイプと定義し、デジタル技術という仕組みと人間心理の相互作用から会計の本質を考察する。著者の田口聡志氏は、実験社会科学や行動経済学の手法を会計学に適用し、この分野の研究をリードする気鋭の学者である。実務知見を背景に、領域横断的なアプローチによって変革期における会計理論の再構築と新たな指針の提示を試みている。

本書は4部構成となっている。第1部では、企業会計のプロトタイプを探るため、会計責任の概念を多面的に検証し、複式簿記がもたらす多層的な信頼の重要性を説いている。第2部では、テクノロジーの普及が人間心理と社会をどう変えるかを前提に、会計・監査の根源的なあり方を検討している。集約情報としての利益の有用性が相対的に低下しても、活動の成果たる利益は会計責任履行の観点から不可欠であると論じる。さらに、AI監査により監査品質が高まっても報酬に反映されにくい「監査報酬のジレンマ」や、不正を見逃した際に監査人の責任が重く判定されうる「監査責任のジレンマ」といったデジタル時代の課題を指摘し、ベネフィットやコストの発信を促している。第3部では、Non-GAAP利益の開示や四半期開示制度といった近年の実務課題を取り上げ、開示情報の信頼性と会計責任の関係を整理している。加えて、国際的な会計規制を題材に、原則主義と細則主義といったルールタイプによる規制の今後の方向性について知見を示している。第4部では、サステナブル経営に向けた未来志向のガバナンスのあり方を考察し、会計責任の新たな地平を展望している。そして終章において、企業会計のプロトタイプを考えるうえでは「信頼」と「責任」の概念が重要な鍵になると結論付けている。

本書の学術的な意義は、企業会計を単なる制度や技術の集積として捉える視点から一歩踏み出し、「仕組みと人の相互作用」というアプローチを取り入れた点にある。行動経済学や実験社会科学の手法を通じ、情報自体の信頼性にとどまらず、人同士の「相互信頼」と責任の観点から会計のあり方を論じている。

実務的視点からは、本書が提示する原理的な考察は示唆に富む。生成AIの活用やNon-GAAP開示といった現代の喫緊の課題に対し、監査報酬や監査責任がどのように変容するかを多角的に検証している。テクノロジーの進化や社会環境の激変に直面する実務家に対し、これからのAI活用時代に監査人はどうあるべきかという将来像を検討するための重要なヒントを与えてくれる。公認会計士が専門職としての倫理的基盤や「信頼」という究極

の前提を再確認し、環境変化に左右されない思考の軸を構築するうえで、大いに貢献する一冊である。

本書は、デジタル社会における会計・監査の未来像を描き出すための見取り図となる一冊である。テクノロジーと人間が共存する時代の指針として、今後の実務と研究のさらなる発展に寄与するものと期待される。激動の環境下で実務を模索する公認会計士はもちろん、制度設計に携わる研究者や企業関係者にも広く推奨したい。

(評者 学術賞審査委員会副委員長 水田真也子)

著者の略歴

田口 聡志

同志社大学大学院商学研究科後期博士課程教授、博士(商学、慶應義塾大学)、公認会計士。(株)スペース社外取締役、(株)GTM 総研取締役、グローリー監査法人パートナー、公認会計士試験委員(監査論)を兼任。慶應義塾大学商学部助手(有期)、新日本監査法人(現・EY 新日本有限責任監査法人)等を経て現職。

主著:『デリバティブ会計の論理』税務経理協会、2005年、『実験制度会計論-未来の会計をデザインする』中央経済社、2015年(第58回日経・経済図書文化賞、第44回日本公認会計士協会学術賞、日本ディスクロージャー研究学会2017年度学会賞(書籍の部)を受賞)、『教養の会計学:ゲーム理論と実験でデザインする』ミネルヴァ書房、2020年(日本経済会計学会2021年度教育賞を受賞)、『企業会計の本質を巡って:プロトタイプとデジタル社会』税務経理協会、2025年、『財務会計の思考法』中央経済社、2025年、How gender and prosociality affect machine interaction in tax compliance: A game-theoretic experiment. Journal of Behavioral and Experimental Economics, Volume 116, 2025(共著)、ほか多数。